

水曜コラム+

## 日銀いよ金融教室 第113回：「子年」にちなんだ日銀券の話

2020年1月8日（水）（愛媛新聞 E 4 編集係）

新年あけましておめでとうございます。令和最初のお正月、皆様、いかがお過ごしでしたでしょうか。本年が、皆様にとりまして良い年になりますことを心よりお祈り申し上げます。今年の子年です。今回は鼠にちなんだお札の話を取り上げます。

昨年公表されたとおり、令和6年度に、新しい紙幣が発行されます。肖像は、新一万円札「渋沢栄一」、新五千円札「津田梅子」、新千円札「北里柴三郎」が予定されています。ところで、今年の干支「子（鼠）」が描かれたお札が発行されているのをご存じでしょうか。明治15年（1882年）の日本銀行設立後に、はじめて中央銀行券（日本銀行券）が発行されましたが、そこで採用された肖像が大黒天（大国主命）で、3匹の鼠と一緒に描かれています。これは大国主命が神話で鼠に救われたという故事にちなみ、鼠が出るのは豊穰の証しとされていることに起因しているそうです。

このお札の発行は、日本銀行設立の経緯と深く関係しています。明治維新以降、財政的基盤のまだ固まっていない明治新政府は、その資金の調達を不換紙幣の発行に依存せざるを得ませんでした。明治10年（1877年）2月に西南戦争が勃発し、大量の不換政府紙幣、不換国立銀行紙幣が発行され、激しいインフレーションが発生しました。そこで、大蔵卿松方正義は、通貨価値の安定を図ること等を目的に、正貨兌換の銀行券を発行する中央銀行を創立しました。このとき発行されたのが、大黒天と3匹の鼠が描かれた紙幣、所謂「大黒札」です。

このお札の表面には、大黒天、鼠とともに、「日本銀行兌換銀券」や「此券引かえに銀貨拾圓相渡可申候也」との文言が表記されています。当時の日本は事実上の銀本位制下にあり、日銀券と引き換えに正貨である銀との交換が可能となる兌換日銀券でした。

大黒天が最初の中央銀行券に採用された経緯は定かではありませんが、それ以前に発行された国立銀行紙幣に恵比寿像が描かれていたことから、同じ七福神の財神である大黒天を採用したとの説や、大黒天は藩札として使われてきた図柄で、豊穰神として大衆の間に定着していること、さらに不景気の中で大衆が商売繁盛を願う気持ちを表したものなど、諸説存在しているようです（植村峻「紙幣肖像の近現代史（吉川弘文館）」より）。ちなみに、このお札は、紙質強化を目的として、材料に蒟蒻（こんにゃく）を混ぜていたため、鼠や虫に食べられる被害が多発したそうです。

このお札の肖像となった大国主命は当地道後温泉に関係があることは皆さんもご存じか  
と思います。伊予国風土記逸文には、大国主命が少彦名命と当地を訪れた際に、重病にか  
かった少彦名命を、道後温泉の湯につけると、病気が癒え、元気になった少彦名命が石の  
上で踊ったと記されています。その石は「玉の石」と呼ばれ、今も道後温泉の北側に奉ら  
れています。私もこの年末に東京から来た家族を連れて見てきました。ちなみに、この大  
黒札は、偽造防止のため、当時あまり流通していなかった青色インクを利用してしまっ  
たが、温泉等に浸かると化学反応を起こして黒色に変化し、かえって偽造が容易になっ  
たといわれています。冒頭申し上げました新日銀券は、世界初の最先端技術等により偽造防止  
抵抗力を一段と強化します。こうしたことは、お札の信任を高め、通貨価値の安定に繋  
がるものと考えられています。（日本銀行松山支店長・堂野敦司氏）